

解放されゆく壁  
— 4つの表情を持つアトリエ —

■ Background

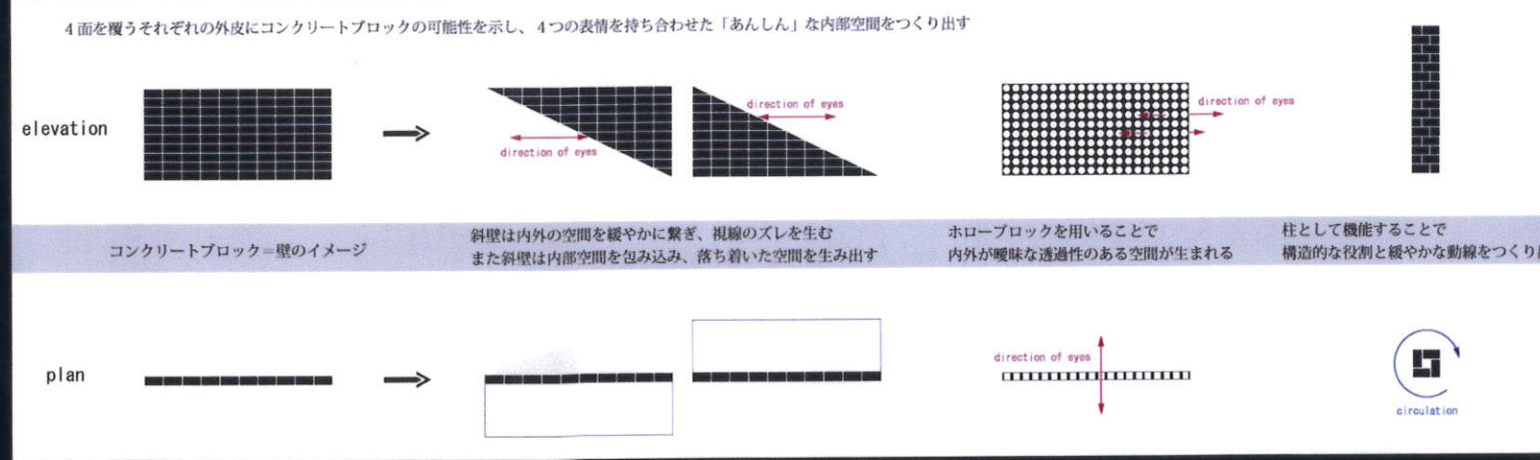
コンクリートブロックと聞いてわたしの中のイメージは、どの街のどこの住宅にも存在する「壁」というイメージが強い。ブロック壁は住宅と住宅、住宅と道路の境界であり、それはどこことなく街や人との接触を拒む悪印象を生んでいると感じる。だが、裏を返せばそれは住宅を守ろうとする安心感も同時に孕んでいる。



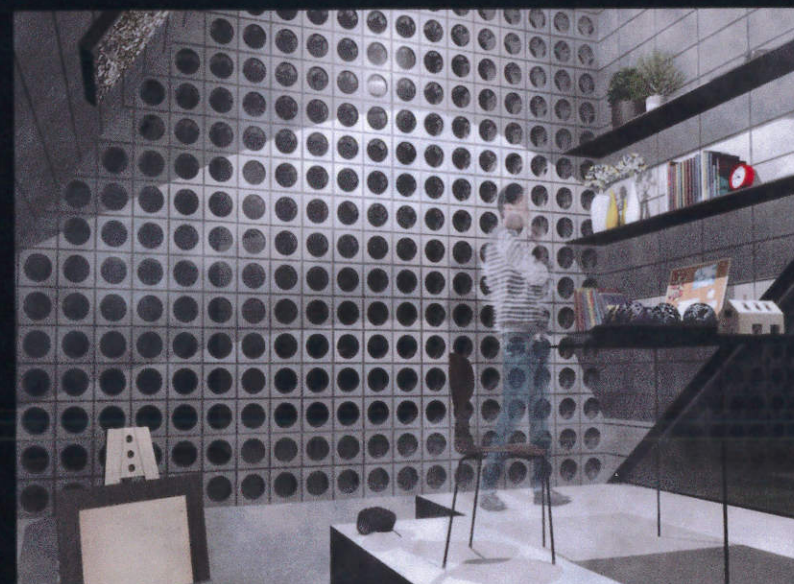
■ Concept

私はこのコンクリートブロック=壁という印象を解放するために、壁というイメージの解体、再構築を行い、コンクリートブロックの可能性を模索する。本来コンクリートブロックの魅力には、ひとつひとつの小さいブロックから様々な形態への可能性が示せることにあると感じる。今回は、コンクリートブロックで内部空間を覆う外皮の可能性を示しながら、それが内部を暖かく包み込むような「あんしん」な空間であり、街に対しても開かれたアトリエ兼ギャラリーを提案する。

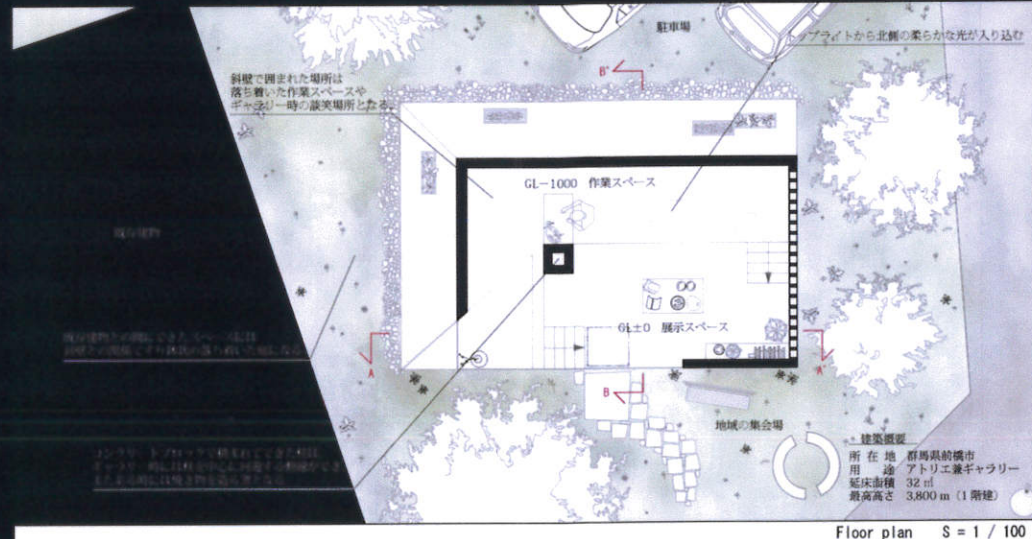
■ Diagram



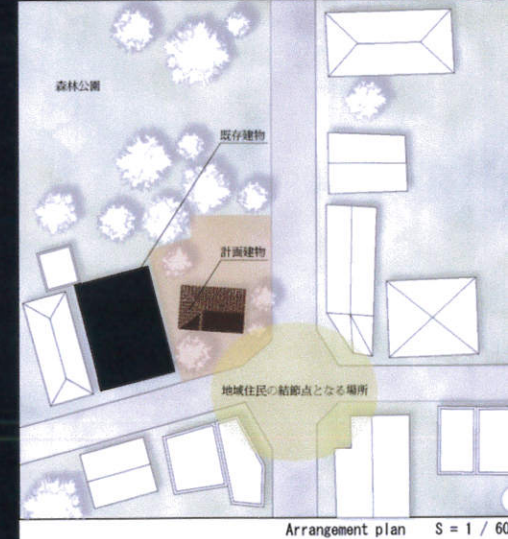
東側から西側を見る。(昼)  
斜壁で囲まれた場所は落ち着いた作業スペースやギャラリー時の談笑場所となる。



西側から東側を見る。(夜)  
ホローブロックでできた透過性の高い東面は、昼は内部へ木漏れ日のような光を取り込み、夜は街に対して目印となる光が溢れ出す。



北側は駐車場、南側は道路側のアプローチとなる地域の集会所、西側は既存建物と斜壁との関係ですり鉢状の落ち着いた庭になる。基本GL±0のスペースは展示スペース、GL-1000のスペースは作業スペースとなる。ギャラリー開放時には中央の柱を中心にして回遊性のある動線となる。内部空間はそれぞれ表情のある外皮から「あんしん」なスペースが生み出される。



場所は群馬県前橋市との住宅街。敷地は母屋の東側の交差点付近にあり、北側にはちょっとした森林公園がある。ここに主人の趣味であるモノ造り・モノ集めのためのアトリエと、地域の方々が観覧できるために時にはギャラリーとしても使用される空間を計画する。

